

稲わらの秋すき込みのすすめ

地球温暖化が進むと、水田土壌中の有機物の分解が促進され地力を一時的には高めますが、養分の消費や乾田化も早まり、地力が低下しやすくなるので土づくりがより必要となります。

稲わらは土づくりにとって有用な有機物資源であり、秋施用は、堆肥施用と同等の効果が期待できます。米の収量・品質の維持・向上のため稲わらの秋すき込みを実施しましょう。

1. 稲わらの秋すき込みの最適な時期

稲わらの分解は、地温 15℃以下になると、微生物の活動が低下するため、稲わらを完全に腐熟（分解）させるためには、地温の高い10月中旬までにすき込みを行いましょう。

耕深は、トラクターの作業能率や腐熟促進等を考慮し5～10cmの浅うちとしましょう。

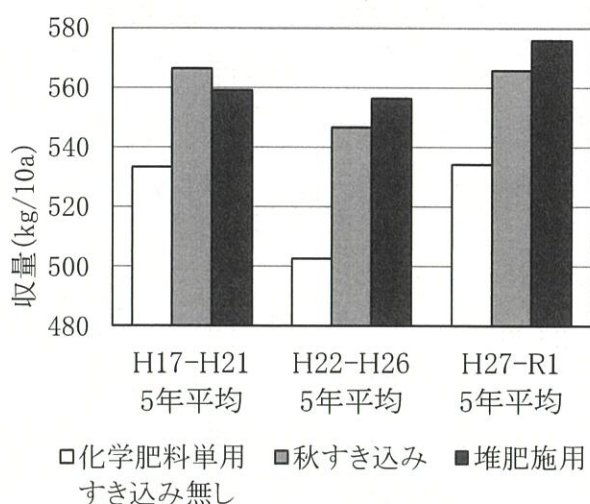


図1 有機物長期連用による収量推移
(H17年～R元年、農総研基盤)
※コシヒカリ場内・現地の2ほ場平均

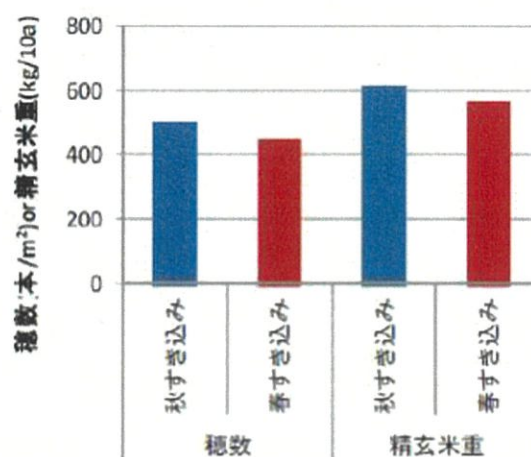


図2 稲わらすき込み時期による穂数及び精玄米重
(トドロキワセ) の違い (昭和52年、新潟農試)

○ 稲わらの春すき込みは、秋すき込みに比べ、穂数や収量が減少する。

稲わらの秋すき込みは、春すき込みに比べ、分げつ期の土壌の異常還元が抑えられ、温室効果ガスであるメタンの発生や根ぐされの原因となる硫化水素などの発生が軽減されます。

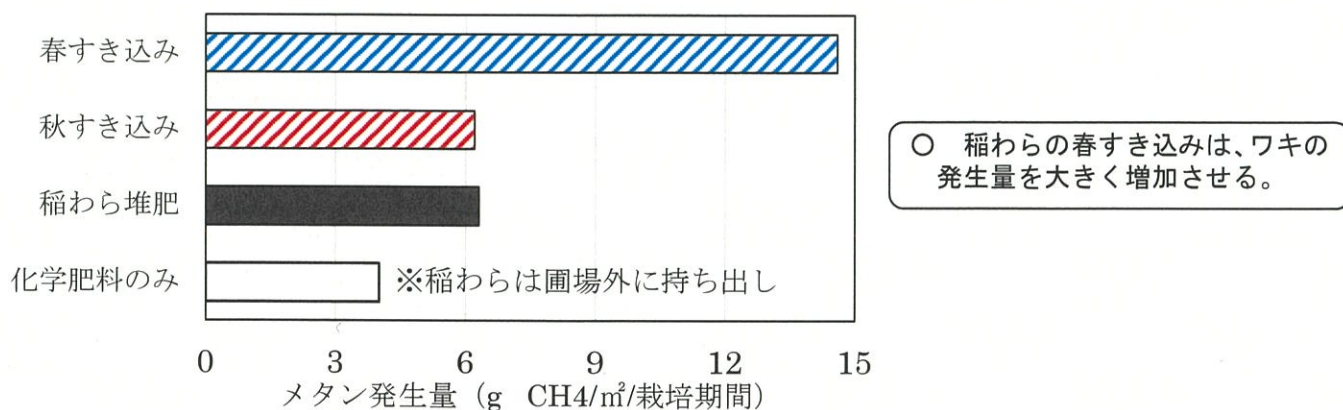


図3 水田からのメタン発生量に対する稲わら処理の影響（平成5年、新潟農試）

2. 稲わら分解促進資材

稲わらを完全に腐熟させるためには、稲わら分解促進資材の活用も効果的です。使い方は、稲わらに直接かかるように散布してください。雨の日の後など、稲わらが湿った状態が効果的です。散布後はできるだけ早く土壌にすき込んでください。

詳細は、肥料農薬部・肥料農薬推進課の営農レポート8月号を参照ください。

表 稲わら分解促進資材

資材名	容量	形状	10aあたり 施用量
ワラ分解キング	10kg	顆粒	10kg
アグリ革命	2kg	細粒	2kg
アグリ革命アクア	100ml 500ml	液体	100ml (希釈して使用)



(担い手・営農支援部 担い手・営農支援課)

※ 掲載内容の無断使用・転載を禁じます。